

大学放浪記 (11)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、幸いにも参席の機会を得た若いタイ人の結婚式（パーティ）にまつわる話題を取り上げる。メイン・イベントの結婚披露宴の約1週間ほど前に知人の一人から、来週の日曜日にデイナー・パーティがあるが参加できるかと問われた。さらに聞いてみると筆者のよく知る先生からの間接的な情報伝達であることがわかった。その様な関係、あるいは良く知っている背景であるなら、直接連絡を取り情報の詳細を聞いておくべきであったが、あの人からの誘いなのだから間違いは無い、万難を排して参加すべきと言う基本的姿勢があったのでそれ以上深くは確認も為なかった。言葉の端々に、結婚披露宴らしき内容も聞こえたが、とにかく参加の意向で準備していた。その彼の話の中で、できれば上着ぐらいはフォーマルなスーツ、さらにできるならネクタイを着けて出席するのが良いだろうという程度の示唆があった。そしてメイン・イベント当日の午後、知人を通じて情報を流して頂いた、先生からの直接の電話があり、今夕のイベントには参加できるかどうか、との問い合わせが電話であった。既に参加の意向は決めていたので、簡単に「もちろん参加の意向」であることを伝えた。誰が貴方をピック・アップするのかと言うことで、中に入って情報提供を頂いた知人がピック・アップして、送迎してくれると簡単に答えて電話を終えた。定時に現地に到着すべく、早めに出発して遅れないように備えた。途中、送迎してくれる知人の知り合いの家に立ち寄り、チャイニーズ・ニュー・イヤーズの挨拶をすませて、ほぼ定時にパーティ会場に到着した。招待参加客の車で駐車場は満杯で、いくらか駐車すべき空き地を探したが、整理員に頼んでうまく探してもらった。早速会場に向かい登録のため受付に向かい、祝辞と名前を書いて中に入る。受付時でも既知の担当女性の顔も見ることができたので、うすうす結婚披露宴である事が分かってきたが、花嫁や花婿が誰なのかは分からなかった。会場に入る前に既知の先生の姿も見ることができたので、少しずつメイン・イベントの内容が分かってきた。会場に入ると花嫁花婿が来賓を迎え、一緒に記念写真を撮ると言うのがしきたりのようであるので、それに従った。記念写真のときに花嫁が人なつこく筆者の腕を抱える仕草をしたので花嫁の招待が誰なのか、その時点でも分からなかった。案内された席に座ると周りは殆どが既知の人ばかりであった。老舗の中華料理店は数年前に別館として新しく開店したもので、駐車場も建物も広い空間があり、雰囲気も満足のいくゆったりした感じである。座席についてあたりを見回すと後からやってくる来賓の多く、いや全部と言っても良いほど既知の人ばかりであった。記憶を辿るとやっとその背景が分かってきた。その背景とは次のようである。

お世話になった先生がチーム・リーダーを務める長期の共同研究の研究者とその支援スタッフの一人が花嫁であった。ウエディング・ドレスを着た花嫁はこれまで見てきた彼女

とは異なり、確認するのに時間がかかったと言うのが事実である。だからこそ記念撮影の時にひとなつこく筆者のそばに立った意味が分かった。またコロナ禍で参加者のほとんどがマスクをして居ることも、個人の確認に時間がかかった原因のひとつであった事もあるが・・・。「なるほど、そうか、そうだったのか」とこれまでの関係、背景、経緯が急に浮かび上がってきて、やっと全てを理解した様な気持ちであった。中華料理のコース・メニューにしたがって次から次に料理が運ばれ、臨席の客人とワインやビールを飲み干すうちに、花嫁花婿の紹介となった。2人がテーブルの間に設けられた真っ白な通路を腕を組みつつ雛壇に向かい、途中周りの客席から紙吹雪が掛けられ、未来に向かう若い2人を祝福する。ようやく中央のひな壇に辿り着き、両家の両親が花嫁、花婿それぞれの両脇に立ち、パーティー参加への謝辞、その後2人の成り染め、短時間にまとめたビデオによる紹介、花嫁が後ろ向きになって未来の花嫁候補への花束投げが行われ、パーティーもお開きに向かう。せつかく記憶が戻ったのであるから、あらためて既知の花嫁の父のところに出向きお祝いの言葉を捧げた。在職時代からも、そうであったようにタイの学生、知人のお祝い事には時間の許す限り参加して、その成長を確認し、さらにその後の将来に向けての励ましの機会とし、自分なりの姿勢を示してきた。大型共同研究プロジェクトが大学出の若者にとって就職までの、あるいは就職先が未定の彼らにとって、労働の機会と実務経験の場所を提供する場所としても大きな役割を果たしていることをしみじみと感じた。これまで筆者が見てきた感覚から、大学出の若者の多くは卒業と同時に就職ができる環境にはないと考えている、就職しても長居はせず2、3年ほどで転職、あるいは大学院進学など、あるいは次から次へと転職をして居る若者を多く見てきている。そうした事を知っている筆者にはプロジェクトがもう一つの側面から「就職」に対する短期間臨時雇用の良き役割を果たしているとも考えている。事実、上記の知人でもある先生が他大学との共同で構成した申請書を「研究プロジェクト長」として申請したが、要職の座を巡って「政敵」とも見れる立場の人物が署名を拒否し、他大学の研究者を「長」とする対応で何とか申請したと言う事も聞いた。同時に、プロジェクトがその様な背景で申請を認可されないと、そのプロジェクトで雇用されるスタッフも雇用できなくなる。その研究プロジェクトに参加している研究者の一人は「この点」を取り上げ、署名を拒否した要職にある人物への挙動、姿勢に批判混じりの意見を述べていた。もちろん上記したことは研究の学術的内容とは殆ど無関係で有り、そうした批判的意見を述べる方がおかしいということにもなるが、つまらぬ私情や政治的介入が招く馬鹿げた話の例でもある。花嫁はこのプロジェクトのスタッフとして在籍し、筆者もよく知る仲である。彼女のみならず、5~6名のみならず、時には10名近いスタッフがこのプロジェクトでは働いていた。種々のアプリを必要とする情報機器を用いたいくつかの作業は、彼ら若い人達の独壇場である。コロナ禍でオンライン会議が頻繁と成り、これら情報機器を使いこなせるかどうかが老いた筆者には苦痛でもあったが、携帯電話の購入、使い方、困ったときの対応など、まさに秘書代わりの助っ人としても大いに世話になった。有り難い話で有り、心底感謝の気持ちで堪えない。研究会に参加する場合

の航空券、ホテルの手配、各種書類の処理、などまさに痺いところに手が届くと言う環境でもあったので感謝を込めて、素直に祝意を表すことができた。もちろん今回だけではなく、これまでの同様のイベントにはできるだけ漏らさず参加の機会を創るように努力してきた。また一方ではその後どれだけ成長したかを確認する機会としての認識もあった。それだけに謝意と祝福以外は殆ど無く、素直に自分の気持ちを保つことができることを嬉しく思っている。

ところで、ここではいくらか余談を記す。この中華料理店に来て何時も思い出すのは、いささか残念なことでもあるが、少し批判めいたことを書くことを容赦頂きたい。あくまでもつまらぬ批判を書くつもりはないが読者のいくらかには国際交流に関心があるかと思うので、事実として参考に為頂ければ幸である。筆者が在職時代に相棒（筆者とは比較にならないハイレベルの教授）と立ち上げた国際交流は日本、中国、タイの大学が毎年ホスト役を担いセミナー・シンポジウムを開催するプログラムがある事は既述してきた。招聘されてタイの大学に赴任した当時、筆者が驚いたのは、このプログラムに参加した参加学生を帰国後に大学側が「よくやった、ご苦労さん。これからも頑張れよ」と言う意味を込めた反省会と慰労会を兼ねたパーティーがホテルで行われて居た。筆者はそれを見て自分の大学よりは「進んでいるなあ」と驚いたものである。それに比べて自分達はどの様に対応してきたかを顧みると、慰労会は公費ではなく全て自分と相棒の家に招いて労をねぎらったものである。それだけに上記の様に「進んでいる」と感じたのも当然である。そうした記憶がある中で、ある時この事業（上記のプログラム）に参加後タイに帰国して、当然のように慰労会が行われるであろうと予測していたが、いつまで待ってもそうした動きはなく、それなら参加学生の有志だけでも集まって食事のひとつでもしてはどうかと考え、全員に情報を流し都合を聞いた。その食事会の前日、参加学生の一人と一緒に行った他の先生方にも声を掛けても良いかと聞いてきたので、「もちろん問題は無い、本来はその先生からそうした話が出てくる」と期待していたが、一向にそうした対応がないので辛抱できず貴方方に声を掛けた次第だと説明した。学生が連絡すると同行した先生方は「出席しない」と言う事なので、それなら仕方が無いと意を決して自分達だけで何とか為ようと考えた。しかしどこか良いレストランはないかと考えたが、余りそうした事を知らぬ筆者にはどうしようもない。そこで関係部署のスタッフに探して貰い、そのレストランを予約して貰った。その会食の前日であったか、後日であったか、定かな記憶は無いが、出席しないと回答してきた教員の一人が筆者を訪れ、不満めいた表情で「私のスタッフを無断で使うな、あのスタッフはまだトレーニングが必要だから」と言うことであった。どうも、自分が参加教員としてその役を担っているのだから、「相談にも来なくて勝手な事をするな」と言う意味である事が分かった。しかし、すでに予約したし、支払い勘定の全ては筆者がカバーし、全くの私的対応であるのに何故文句を言われなければならないのか異論はあったが、意見を言っても仕方が無いのでそれ以上は何も言わなかった。さてその後、どのような事が起きてきたかをいくらか披露しておく。その後、何回も同様のプログラムが実施さ

れたが、筆者はそこから外され、その後の参加はない。しかしプログラムの創始者ということもあり。ホスト大学からは経費負担を明示した招聘状がきたので参加したが、このときの大学側の対応がおもしろい。プログラム参加後、帰国してから参加学生を集めて反省会を含む慰労会を大学（実質は、文句を言っている学部長補佐）が参加学生全員を集めて同様の会を実施しているようである。またプログラム参加のための航空機（航空会社）の選定も独自に勝手に手続きを進めようとしていたが、筆者自身が相手のホスト大学からの招聘で参加すると聞くと、慌てたように筆者と同じ航空会社に変えとか、外部から見て大学がばらばらでなく、一枚岩として参加していると言う姿勢を固辞するかのような駆動である。コロナ禍前」のプログラム参加時には、筆者は出発日が別の国際学会出席のために遅れることを事前に報告してあった。それまでは大学側は独自に航空会社を決めていたが、筆者の招聘状の情報を聞いてわざわざ筆者が別に定めた航空会社に変更するなど、理解に苦しむ対応が見られた。そこまでして一体感、あるいは一枚岩を外に向かって示したいのかと正直驚きである。そこまで考えるなら最初からもう少し対応の姿勢を正せば良いというのが筆者の意見である。このような人物が要職に就いている現実「極めて残念」としか言いようがない。でもそうした現実であっても時が経てば、彼らの多くはやがて学部長補佐や学部長、研究所長、理事、副学長、ひょっとすると学長などの要職に就くのであるから驚きである。そもそも、そうした事が起きる原因は、学位を取得して、すぐにその様な要職の機会が待ち受けている。要職就任への指名が自分への実力、能力への高い評価の結果であると誤解している事に起因する。要職に就いたら、これまでの経緯、背景などについての回雇、さらなる勉強が不足しているからである。これまでと同じように自動的にプログラムの実施を継続しているからこうした結果を招く。つまりところ経験も少なく、専門家としての実績も少なく、若くして要職に就くとこのような事が起きるのは当然であろう、と言うのが筆者の考えである。要約して簡単に言うと学部の「長」は学部長であり、一般に学部の構成員や職員の意向を集めた選挙があるが、これに関しては学長も意向を挟むことができる。学長に取り入って保身を図るのもひとつの考え方で有り、またそれを積極的に自ら推進する者も居る。過去にも同じような事を記したが、あらためて補足をして理解を深めて頂く事にする。学部長が人選を誤ると、とんでもないレベルの低い者がそのポストを得る事になる。上記した様に、自分が高い評価を得て指名されたとは勘違いする者もいるが、間違えて指名されたとしても、自ら気づき勉強し、努力し、学ぶ勇気を持てば救われるが、前任者のやってきたことを全面的に否定し、自らの存在を強調するばかりに何もせず、公的な仕事を怠ることである。これも保身が先に立つやりかたの1例である。筆者自身は給料の半分ほどを理由もなく差し引かれたこともある。その人物は「私がやったのではない」とわざわざ言い訳に来たが、かつて同じ部署で働いていた職員はそれを否定している。どっちでも良いことだが、こうした事も学部長補佐はできるらしい。それに対して任命権者がどのような処置をしたかと言うと、表面上は喧嘩両成敗、裏では必ずしも引き分けではなく、任命権者としての恥になる事を敢えてやる筈がない。この事が

筆者の言う、正しいことをして居ても有利に運ぶことはないと言う一例である。最大限の対応を為たかに見えても、それでも両成敗、引き分けのレベルである。たまたま、その時の学部長がそうであったと言えはそうかも知れないが、見ていると殆どがそうした裁きでの決着が一般的に見える。最終的に外国人被雇用者には恐れることなくもの言える切り札（カード）が無いことである。心しておくべき項目、事項である。